

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 1983年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
- 1983年4月 東京大学教養学部助手
- 1986年4月 法政大学社会学部専任講師
- 1988年4月 法政大学社会学部助教授
- 1994年10月 東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
- 1997年4月 オックスフォード大学オリエンタル・インスティテュート研究員（海外研修）
- 2000年4月 同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
- 2005年3月 博士（社会学）学位 東京大学
- 2005年9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）
- 2009年6月 濱田総長下での東京大学「行動シナリオ」プロデュース会議メンバー
- 2011年4月 東京大学人文社会系研究科副研究科長（～2013年3月）
- 2015年4月 五神総長下での「東京大学ビジョン2020」起草会議メンバー
- 2017年4月 東京大学文学部長・人文社会系研究科長（～2019年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化の社会学、歴史社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。柳田国男の方法論。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。ケータイ電話論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践史と方法意識の展開。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、浅草公園十二階凌雲閣の研究など。

c 概要と自己評価

2016年度から2017年度にかけては、2014年にまとめられた『論文の書きかた』を踏まえて、大学院の演習において実践的な論文執筆をめぐる教育をおこなった。2017年度からは学部長職のため、学部講義と演習は担当する余裕がなくなったが、大学院では本研究科の社会学・文化資源学専門分野の学生だけでなく、学際情報学府や総合文化研究科等の多様な学生の論文指導を、当該学生が自発的に選んだテーマにそって実施した。柳田国男研究では、歴民博との共同研究でのサハリンの現地調査を踏まえ、共著『柳田国男と考古学』や『国立歴史民俗博物館研究報告』において、これまでほとんど論じられてこなかった「樺太紀行」の方法的な意義を発掘している。実験的な試みでもあった都市東京のシンボルであった建物の研究と民間学者のライフヒストリーを組み合わせた『浅草公園凌雲閣十二階』について、江戸東京博物館のシンポジウムに参加し、その報告書に発表内容にもとづいた報告を載せて啓発的な社会発信に携わった。この著作は、学際的な日本生活学会から、2017年度の今和次郎賞を授与された。また歴史民俗博物館の「万年筆の生活誌」の企画展示にかかわって、この普及した筆記具が人びとの文字を書く実践をいかに変えたのか、またこの新しい「民具」ともいべき近代の発明がいかなる産業化のプロセスを経たのか等を分析し、新たな歴史社会学の可能性を追求した。研究科長の職務の煩雑さに時間をとられて、2017年度に完成する予定で進めてきた『文化資源学講義』の刊行が遅れて2018年度にずれ込むことになったのは残念であった。

d 主要業績

(1) 論文

- 佐藤健二「柳田考古遺物の採集地はどこか?②: 樺太紀行の旅程」設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦編『柳田国男と考古学』新泉社、44-53頁、2016.5
- 佐藤健二「柳田国男と南方熊楠との交流: 民俗学の自覚」設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦編『柳田国男と考古学』新泉社、126-132頁、2016.5

佐藤健二「流言研究と「社会」認識：戦後日本社会学における「社会的なるもの」への想像力」池岡義孝・西原和久
編『戦後日本社会学のリアリティ』東信堂、231-263 頁、2016.10

佐藤健二「明治三十九年樺太紀行」再読『国立歴史民俗博物館研究報告』202 号、243-265 頁、2017.3

佐藤健二「毛筆字とペン字」「丸善の広告」「大衆化した万年筆」「万年筆を民俗学がとりあげる意義と可能性」「手
紙・日記を綴る」「記録する」小池淳一編『万年筆の生活誌：筆記の近代』国立歴史民俗博物館、8, 122, 125, 145,
162, 172 頁、2016.3

佐藤健二「凌雲閣十二階からなにが見えたか」『浅草地域のあゆみⅡ：近代化と盛り場の変容』調査報告書第 33 集、
東京都江戸東京博物館、39-57 頁、2018.3

(2) 書評

KENJI SATÔ, 2016, "Book Review: The Undiscovered Country, Text, Translation, and Modernity in the Work of Yanagita Kunio.
By Melek Ortabasi," *International Journal of Asian Studies*, Vol. 13, No. 2. July

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師 (2016 年度)

(2) 学会

日本社会学会、社会調査協会